



基本理念 この病院で最も大切なひとは医療を受ける人である

「地域包括ケア病棟立ち上げのお知らせ」

東Ⅱ病棟師長 宮城 尚子

令和7年4月より、沖縄県で初となる【精神科地域包括ケア病棟】が立ち上がりました。

精神科地域包括ケア病棟とは、精神疾患を有する患者さんが地域に移行・定着できるよう支援するための病棟です。主に急性期治療を終了した患者さんに対して、地域生活への移行を支援する重点的なサービスが提供されます。

当病棟におきましても、地域包括ケアシステムの一環として質の高い精神医療の提供を目指しています。主治医が病状の評価に基づいた診療計画を作成し、適切な治療を実施するとともに、医師、看護師、薬剤師、精神保健福祉士、作業療法士、心理士の多職種が協働して患者さんの希望や状態に応じて、退院後の療養生活を見据え、必要な療養上の指導、服薬指導、作業療法、相談支援、心理支援などを行います。

退院後は、自宅やグループホームなど生活の場は多岐に渡ります。意思決定支援を尊重し、その人らしい暮らしが継続できるよう支援する必要があります。患者さんの希望やストレンクス(強み)を大切に、病院と地域の繋がりを多職種チームで支援できるよう、当院では訪問看護、デイサービス、ACT(包括型地域生活支援プログラム)の活動を強化しています

開棟し間もないため、手探りな状況からのスタートではありますが、職員一同となり頑張っていきたいと思っております。皆様からのご支援、ご協力の程、宜しくお願いいたします。

● 地域医療連携室だより

精神保健福祉士 平良 博之

琉球病院では、受診相談や地域、行政、他医療機関からの窓口として地域医療連携室を設置しております。

一般的な精神疾患をはじめ、アルコール依存症を含むアディクション全般、治療抵抗性統合失調症治療薬であるクロザピンによる治療、認知症、児童思春期外来といった様々な疾患に対応できるよう診療体制を整えております。最近では、うつ病治療に関してr-TMSの相談も増えてきております。

また、この度精神科地域包括ケア病棟を立ち上げ、患者さんの地域移行・地域定着の支援に多職種で取り組んでいるところです。

初診について、当院は予約制となっております。外来または入院治療へのお問い合わせはお気軽に地域医療連携室までお電話ください。

院長



ふくじ やすひで
福治 康秀

1964年生まれ、那覇市出身、首里高校卒。
1993年琉球大学医学部卒、琉球大学医学部精神神経科入局。
95年那覇市立病院精神科、96年琉球大学精神神経科、2009年琉球病院精神科部長、2010年副院長を経て2014年琉球病院長に就任。
日本森田療法学会理事。
日本病院・地域精神医学学会理事。
琉球大学医学部 臨床教授。

診療科

- ・一般精神科
- ・こども心療科
- ・クロザリル外来
- ・アルコール依存症等外来

病床数

353床

- ・精神 151床
(一般精神・クロザピン専門・精神科救急)
- ・アルコール依存症 44床
- ・児童思春期ユニット 4床
- ・重症心身障がい 90床
- ・医療観察法 37床



路線バス 那覇BS(下り)または名護BS(上り)より沖縄バス「77番名護東線」浜田バス停下車徒歩3分

自動車 那覇市から40分沖縄自動車道金武インターから名護向け5分

お問い合わせ

時間 8:30 ~ 17:15
(土・日・祝日・年末年始以外)
TEL 098-968-2133(代)
内線 231・234

地域医療連携室(直通)

TEL 098-968-3550
FAX 098-968-7370

治療抵抗性精神疾患への医療

精神科医長 木田 直也



クロザピンの治療状況

治療抵抗性統合失調症の患者さんに対して、当院では2010年2月からクロザピン (CLZ) 治療を開始し、登録症例数は延べ440例になりました。2025年5月のCLZ登録症例は2例で、他の精神科病院からの紹介患者さん1例と当院入院中の患者さん1例でした。CLZ導入前には暴力行為や多飲水などの問題行動のために、隔離や身体拘束が必要な患者さんも多くいらっしゃいましたが、CLZ継続例では問題行動が消失、もしくは軽減し、ほとんどの症例で隔離や身体拘束は解除できています。週に3回のCLZ専門外来も行っていますので、患者さんのご紹介をお願いいたします。

当院でのCLZ治療や沖縄県での地域連携の実際については、ノバルティスファーマ社の医療関係者向けサイトのクロザリル/クロザリル適正使用の流れ (<https://www.drs-net.novartis.co.jp/dr/products/product/clozaril/point/>) でも動画が公開されていますので、ご参照ください。

西Ⅰ病棟

西Ⅰ病棟師長 仲村 智子

西Ⅰ病棟は、重症心身障害児(者)の病棟で、知的障害に加え運動機能障害の程度が低い、いわゆる「動く重症心身障害児(者)」と呼ばれる入所者が対象です。入院当初は、環境に適応することに時間がかかり、自身の想いをうまく伝えることができないなど、不安の多い入院生活がスタートします。私たちスタッフは、入所者の不安を少しでも軽減し、安心した療養生活ができるよう援助し少しでも早く、地域社会へ戻ることが出来るよう精一杯支援していきたいと考えています。今後も医師・看護師・療養介護専門員・保育士・作業療法士・言語聴覚士・理学療法士などの多職種やご家族さん、地域の支援者の皆さまと連携し、入所者個々にあった支援を行っていきたくて考えています。

西Ⅱ病棟

西Ⅱ病棟師長 玉城 由美恵

西Ⅱ病棟は、45床の重症心身障害者病棟です。経管栄養など身体管理が必要な利用者さんのほか、強度行動障害のある利用者も一緒に生活されています。日常生活のほか、院外活動や各行事など参加されている時の利用者は、声を出して喜んだりと普段とちがう表情や行動がみられます。今後も、利用者さん一人ひとりの個性や機能を活かせるよう多職種で連携しながら、治療、看護、身体リハビリテーション、摂食嚥下療法、療育などをおこなっていきたくて思います。

DPAT活動について

心理療法士 諸見 秀太

当院では、災害時の対応について、災害対策部会ならびに災害対策委員会を中心に取り組んできております。災害対策部会は、当院のDPAT隊員が集まり、DPAT関連活動や災害対策委員会活動の検討・計画立案、精神科災害拠点病院の整備等について、話し合いを行っています。また、災害対策委員会は、院内全部署から1名の本委員会担当職員が参加し、精神科災害拠点病院として速やかに対応できるよう、“平時からの備え”を意識した活動を行っています。具体的には、災害時における家族との連絡・夜間時の災害対応・災害対応における職員のメンタルヘルス・災害被害状況のアセスメント・院内における災害直後の緊急対応・飲食やエネルギー資源の備蓄等のテーマに関して、グループワークや短時間のシミュレーション・実動訓練を行っています。沖縄県内でも近年では、R5年台風6号による被害やR6年沖縄本島北部豪雨災害などもあり、自然災害がより身近なものになりつつあります。当院では今後とも当部会・委員会を中心に平時の備えを進めていきたくて思います。



重症心身障がい部門

主任児童指導員 宮川 奏子

沖縄県内には重症心身障害児者施設が5施設あり、当院重症心身障害病棟(療養介護・障害児入所支援)は、自傷や他害、異食、多動、こだわりなど強度行動障害を伴う重度知的障害児者の方々の受け入れを行っています。令和6年度は新規入所が4名、退所(地域移行)が2名でした。入院生活の中では、医師・看護師・児童指導員・保育士・作業療法士・理学療法士・言語聴覚士、療養介護専門員、PSW、栄養士等、多職種で連携・協働しながら、行動障害の軽減や生活リズムの改善を目指し、行動療法、環境調整、リハビリテーション、日中活動(個別活動、集団活動、行事、院外活動等)、薬物調整、家族交流支援等を行っています。地域移行をすすめるためには、入院時より移行(予定)先を見据えた支援(関係機関との連携、移行先との定期的なカンファレンス)が必要です。入院が長期となっている方もいらっしゃいますが、利用者一人ひとりにとって「その方らしくいきいきと過ごすことができる環境、生活の場」を考えながら、行動障害の軽減や行動拡大を目指しています。今後も地域に求められる役割を果たしていけるよう、多職種協働で取り組んでまいります。